

# 續盛衰記

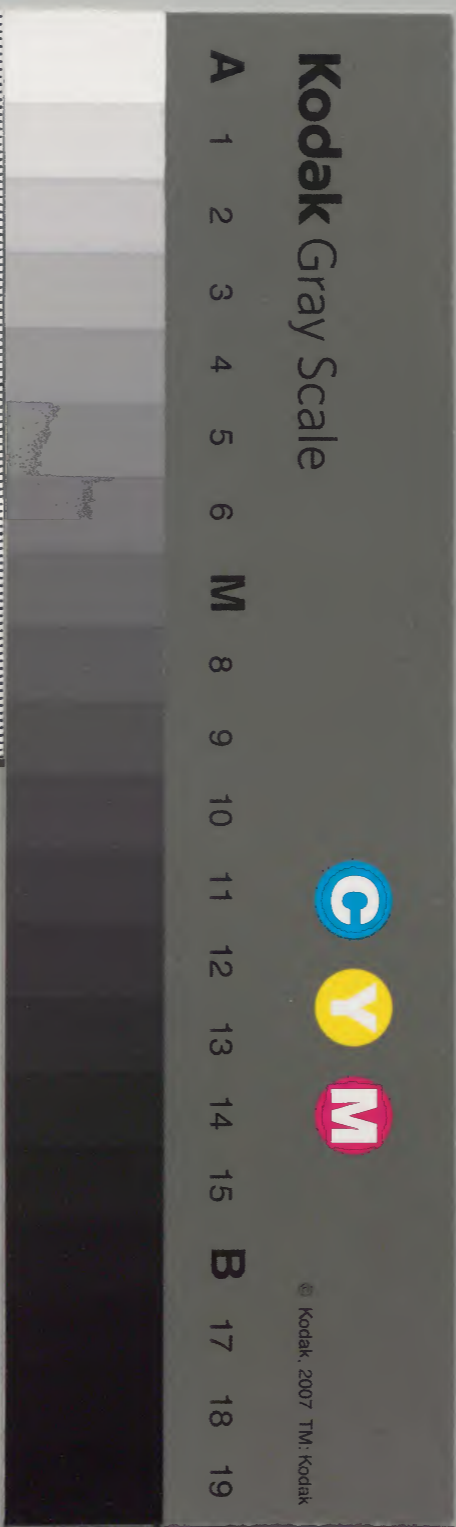
八

內務省圖書  
 第.....番  
 部.....號  
 .....冊

大政官文庫  
 和書門  
 七九一三  
 八一一三  
 冊架函號類

內閣文庫  
 和書門  
 七九一三  
 三二函  
 四八冊架

內閣文庫	番號	和 7913
	冊數	8 ( 8 )
	函號	211 69



續盛衰記

自貳拾三至廿四終

內務省

Large empty table with multiple vertical columns on the right page.



續 盛 衰 記 卷 二 十 三

吉 良 止 野 介 斷 絶 始 末 傳

上 野 介 於 殿 中 為 淺 野 内 匠 頭 被 疵 事

淺 野 家 來 吉 良 宅 入 亂 入 之 時 人 數 手 配 持 道

具 之 事

自 表 裏 玄 関 内 入 切 入 人 數 并 相 言 葉 之 事

上 野 介 取 期 附 淺 野 從 士 働 之 事

吉 良 父 子 家 來 手 負 死 人 并 逐 電 之 事

淺 野 家 來 共 吉 良 宅 口 上 書 一 通 捨 置 之 事

吉 良 家 來 共 口 書 之 事



亂入之者共持參之道具取落附吉良父子疵  
之事并隣家口上書之事

吉良左兵衛配流信州并吉良代々知行之事

吉良先祖正統之事

自夫其子因内八世人人傳其時言及之也

具之也

其體其言吉良父子八世人人傳其時言及之也

其體其言吉良父子八世人人傳其時言及之也

吉良山體其言吉良父子八世人人傳其時言及之也

其體其言吉良父子八世人人傳其時言及之也

續盛衰記卷之二十三

吉良止野介漸滅始末傳

上野介於殿中為淺野内匠頭被疵事

一高家之棟梁吉良上野介源義英ト称シ領知四

千貳百石ニテ從四位上左近衛推少將ニ昇進

セラレ寛文八年ヨリ父若狭守義冬ノ讓ヲ受

三十四年ノ星霜ヲ積テ勤候之處ニ去ヌル元

禄十四年三月十四日公家衆勅答ノアリシ時

殿中ニ於テ播州赤穂之牧司淺野内匠頭長矩

之為ニ疵ヲ被リシカ尺薄手ニケ所之事ナレ

ハ左迄難義ニ非スサレハアワレハ内匠頭殿  
ニテ遂ニ其罪重キカ故殞命所領ヲ失ヒ士卒  
ハ悉ク諸國ニ漂泊シ只無異安泰ナルハ吉良  
トテ羨サレハ無カリケリサテ又上野ハ御  
外科栗崎道有ノ療治ニテ如右乎愈シ先々氣  
カヲ保養之為ナレハ差テ壹城モナカリケル  
俊具服搗之内屋敷ヲ指上本所ニツ目ノ近ク  
相生町ニテ東西七拾四間南北三拾四間壹尺  
合ニ貳千五百貳拾八坪三合三夕之所ヲ被下  
此ニ普請申付ラレケル由但同年十二月六日

上州之願ノ通隱居仰付ラレケリ自夫翌十五  
年壬午ノ冬ニ至リ右ノ普請モ成就シケレハ  
嫡子上杉禪正大弼綱憲之所ヨリ同十二月十  
四日未所新宅へ移徙アリケルコソ天命ノ盡  
ヌル瑞想ナレ

浅野家来吉良宅へ亂入之時人数予配并持  
道具之事

一浅野内匠頭長矩忠義之臣大石内藏助藤原良  
雄七君之離ヲ報センガ為ニ一味同意之健士  
四十六人一致令ノ必死ニナリテ大石ニ与カ

内蔵助

又左二記之

一 鑓持參大將

千五百石家光

大石内藏助藤原姓

千二十四 良雄

一同

三百石物頭法跡ノ元辰ト号ス

原惣右衛門尉

同五十五 元辰

一同

留守居隱居

堀部弥兵衛尉

同七十六 金丸

一同

二百五十石目付後

間瀬久太夫

同六十二 正明

一半弓

百五十石馬廻リ

早水藤右衛門尉

同三十九 満亮

一 鑓

二百五十石馬廻リ

近松勘六郎

同三十三 行重

一同

九十石五人扶持馬廻リ

貝賀弥左衛門尉

同五十三 友信

一同

百石近習剃髮ノ号宗門

村松喜兵衛尉

同六十一 秀直

一同

喜兵衛子部屋住

間 十次郎

同二十五 光與

一同

長助男部屋住

矢頭右衛門七

同十七 教兼

一 薙刀

徒士無足

横川勘平

同三十六 宗判

一 長刀

九十石五人扶持近習

大高原五郎

同三十一 忠雄

一半弓

知行日付部屋住

神崎與五郎

同三十七 則休

一 鑓

九十石五人扶持部屋住

岡野金右衛門尉

同二十三 包秀

右之通り拾四人ハ表門外ヲ堅ノ壹人モ怪キ

者ト答メ答ル者ヲハ即時ニ切り捨テケリ

一 鑓持參

二百五十石物頭

吉田忠左衛門尉

同六十二 兼亮

一 鑓捧

二百石京都留守居

小野寺十内

同六十 秀和

一 鑓

百石馬廻リ

間 喜兵衛尉

同六十八 亮延

内務省

一同 内藏助子部屋住 大石主税 日十五 良金

一同 百石馬廻 中村勘助 日四十四 正辰

一同 喜兵衛二男部屋住 千馬三郎兵衛 日五十 光忠

一同 久太天子部屋住 間新六郎 日二十三 光風

一鑓 知行目付 間瀬孫九郎 日二十二 正辰

一半弓 臺所役人 茅野和助 日三十六 常成

一掛捷 二百石馬廻 三村次郎左衛門 日三十六 包常

一鎗 百石馬廻 潮田又之丞 日三十四 高教

一同 孫大夫養子部屋住 不破敷右衛門尉 日三十三 正種

一長刀 真田定右衛門尉 日二十五 行高

一鎗 百五十石馬廻 水村岡右衛門尉 日四十九 貞行

右拾四人ハ裏門ノ外ヲ堅メケル由尤怪ク答ル者ヲハ切テ捨ル等ニ申合候

一同 自表裏玄関内切入人数并相言葉之事

一鑓 三百五十石用人 厅岡源五右衛門 日三十六 高房

一同 二百石馬廻 矢田五郎右衛門 日二十八 助武

一同 同新 富森助右衛門尉 日三十三 正因

一長刀 百五十石馬廻 奥田孫大夫 日五十六 重盛

一鑓 石石馬廻 岡島八十右衛門 日三十七 常樹

一同 石石五人扶持部屋住 吉田次右衛門尉 日十八 兼貞

内藏

内藏

一同 金拾兩五人扶持 武林唯七 同三十一 隆重

一同 北石馬廻り部屋住 勝田新左衛門尉 同三十三 武克

一同 十内子部屋住 小野寺幸右衛門 同三十七 秀富

此九人ハ表ノ玄関ヨリ切入申候由是モ互

ニ相圖ヲ定メケル也

一鍵 二百石馬廻り 赤垣源藏 同三十四 重賢

一同 百五十石馬廻り 大石瀨左衛門尉 同三十六 信清

一同 同断 磯貝十郎左衛門 同三十四 正久

一同 二百五十石馬廻り 堀部安兵衛尉 同三十三 武庫

一長刀 金七兩五人扶持 銚子傳助 同三十三 武幸

一鑄 金八兩三人扶持 倉野十平次 同三十七 次房

一鍵 百五十石馬廻り 菅谷半之丞 同四十三 政利

一同 喜兵衛子部屋住 村松三太夫 同二十六 高直

一同 北石馬廻り 前原伊助 同三十九 宗房

此九人ハ表ノ玄関ヨリ内へ切入ケル先達

ニ駆向フ者共ヲハ切伏々々奥ニ入ル何レモ

相圖ノ事ナレハ表裏一同ニ切込ケレハ當番

ノ士共大ニ周章狼狽逃廻ル者モ有夜着蒲團

ノ下ニ不動息ヲモ不致寝入タル跡モアリ或

ハ妻戸物陰ニ隠シ居ルモアリ或ハ縁ノ下庭

内務省

内務省



ノ植込ナトニ隠レ居タルモアリ叔又外ハ長  
屋ノ口々ヲ右ノ拾四人宛ニテ堅メタリ若出  
合候テ指突者ハ直ニ討捨ニ仕タリケル由右  
惣人数内へ仕込申候刻階子ニ提表門ノ屋根  
へ是ヲ掛渡シ或ハ堀衆之節一番ニ大高源五  
忠雄ニ番ニ岡島八十右衛門常樹ト名乗テ  
ノ名乗ナシ平押ニ入ルト也相印ハ袖背ニ付  
之

一 相言葉

山カト云へハ川ト答ル

一 替相詞

五十人組カト云へハ三十人組ト答ル

一 相圖之笛

上野介ヲ討取ルノ時吹之

一 纏人數出ル時立勝居勝ノ法用之

一 各鐵鉢 善込 小手指 草鞋

上野介最期附浅野從士働之事

一元禄十五壬午年十二月癸月大十四庚日夜寅

ノ上刻浅野内匠頭長矩之家来四十七人去年  
之春ヨリ主君ノ讎ヲ報セント昼夜旦暮ニ思  
ヒシ所ニ漸ク時節到来ナルヤ日来身命ヲ塵  
芥ヨリモ輕シ今日今曉武州本所吉良屋敷へ押  
寄タリ先大将大石内藏介藤原良雄カ撥束ニ

ハ下ニ鎖リ帷子黒革綴シノ鎧<sup>鎖</sup>袴大小脇差ハ  
九寸五分扱十文字ノ手鏡ヲ持タリ甲之外ハ  
火事頭巾羽織ヲ着シケリ又嫡子大石主税助  
良金襴束右同断其外ノ人々ハ思々ノ鎧着込  
フ着シ手々ニ道具ヲモクタリケルサテ又吉  
良ノ屋敷ニナリシカハ先表門ノ屋根へ階子  
ヲ掛渡シ大高源五忠雄ト名乗テ一番ニ乗越  
ヘタリ又續テ岡島八十右衛門常樹ト名乗ニ  
番乗トソ呼リケル亦同時杉野十平次大力無  
双ノ者ナレハ太キナル掛提ヲ以テ裏門ヲ打

放シ両方一度ニ鐘大鼓ヲ打鳴シ聲ヲ上ケニ  
拾人<sup>休</sup>トツ、両手ニワカリ切り込ミケルト  
キ一番ニ間十次郎光真ト名ノリテ半弓ヲ射  
掛ハツシト當レハ皆々ハツト逃ケニケリ其  
刻玄関ヨリ切込シ者共ノ手本ニ進ム悴武者  
ヲ五六人切倒ス扱又裏門ヨリ推込先門番ニ  
三人切伏一人ヲハ生捕<sup>兼テ</sup>夜明方ニ仕込ヘキ  
ト思ヒシニ月夜故時刻ヲ取違ヘケルニヤ暗  
サハ暗共共知レサル處ニ幸イ用人ニ等シキ  
者<sup>狼</sup>廻ルヲ捕ヘ蛻燭ノ有所申セト云不申

ニ於テハ殺サント申ケル此時彼男申ケルハ  
命ダニ御助ケ被下候ハ、何ニテモ御尋候へ  
ト申候へハ頓テ蠟燭ヲ出セト申ケレハ三百  
挺程取出シ渡シケリ又斤脇ニテ一人捕へケ  
レハ此者大小ヲ投出シ命ヲ御助ケ被下候へ  
ト涙ヲ流シ申ケルヲ幸ト思ヒ渠ヲ先立テ真  
ニ入アタリヲ見レハ夫ヨリ錠ノヲリタル座  
敷有殿<sup>直</sup>居<sup>御</sup>ヲ破リ見レハ中ニ寢所有又見レハ  
只今拔出タル躰也未夕遠ク正ハ行マシト何  
レモ手分シテ尋ケレ尺一円見へサリケリ既

ニ五度ニ及ヒ尋シカ今ニ見當ラズヤルセナ  
ク思<sup>是</sup>腹切<sup>腹</sup>ラントセシ事スワ三度ニ及ヒケ  
リ今少ト思ヒ又一返尋ケレハ臺所ノ端<sup>端</sup>レ炭  
部屋ヲ搜ントテ是ヲ切破リ見ケルニ案ノ如  
ク三人迄ソ隠レ居ル扱コソ爰ニ御座カト錠  
ニテ出ラレ候へト突ケレハ余リノ事ノ悲シ  
サニ茶碗ノカケ炭ナドヲ飛礫ニ打出ス事限  
リ無シ其時頻リニ突立ラレ打物ノ鞘ハツ  
切テ懸ル扱上野介ハ長持ノ上ニ御座テ打物ヲ  
セイカント構ヘツト入敵ノ肥股ヲ四五寸

内  
巻  
七

内  
巻  
七

計切玉へ氏薄手ナレハ別儀無シ然ル處ニ脇  
ヨリ武林唯七隆重ト名乗テ吉良ヲ一太刀大  
袈裟ニ討ハナス時ニ間十次郎ト名乗掛寄テ  
上野介ノ御首ヲソ賜リケル兼テ相圖ノ笛ヲ  
一度ニ吹合皆々一處ニ集リケレハ又一人切  
テ出シヲ渡リ合候へハ此者早キ男ニテ敵ノ  
甲ノ上ヨリニツ三ツ續ヲ打シカ氏元来甲ノ  
事ナレハ事トモセス飛込カウ竹割ト云物ニ  
ニツニコソハナシニケリ斯ル處ニ吉良ノ御  
一子吉良左兵衛義周ハ大長刀ヲ横夕エ出ラ

ル、押續キ年カマシキモノ一人引添イ出ル  
頓テ左兵衛切テ掛ウル處ニ長刀ヲ打落サレ  
逃ントセシヲ肩サキ七八寸程切込ニ追懸ン  
トスルヲ彼老人隔リ邪魔ニ成候へハ終ニ見  
逃シ其ヨリ見不申最早敵ノ首ヲ討取り本望  
是マテト上野介ノ首白ムクニ包ニ鎗先ニ結  
付立退ケルト也

吉良父子家来手負死人 逐電之事

一 上野介家老南長  
屋役人小屋ニテ

小林平八郎

一 上野介用人座敷  
庭ニテ

鳥居理右衛門

内務省

一 左兵衛用人座敷

須藤與一右衛門

一 居間ノ次ニテ

齋藤清左衛門

一 同人中ノ姓小

清水一学

一 上野介中ノ姓

大須賀治部右衛門

一 同断

左右田源八郎

一 左兵衛中小姓

新見弥七郎

一 左兵衛役人

小堀源次郎

一 左兵衛祐筆

鈴木元右衛門

一 左兵衛役人

笠原長太郎

一 左兵衛役人

柳原平右衛門

一 左兵衛坊主

鈴木松竹

一 同断

牧野春齋

一 表門番人

森半右衛門

一 臺所下役人

横須賀村權十郎

右之者共少々志シ有之哉浅野ノ者共ニ立向

ヒ。太カヲモ合セス討レ申候ハ實ニ神妙之由

但シ拾壹人ハ刀脇指ニ血付切込相見ハ残リ

五人ハ働キノ品相知レ不申候

一 手負

一 左兵衛家老小屋

松原多伸

内務省

一人取次役  
當番玄閑ニテ  
奇藤十郎兵衛

同断  
小屋出口ニテ  
清水團右衛門

上野小用人  
小屋出口ニテ  
宮石野左衛門

左兵衛中小姓  
小屋  
山好新八郎

同断  
小屋出口ニテ  
加藤太左衛門

同断  
同断  
主計子  
永松九郎兵衛

同断  
當番玄閑ニテ  
天野貞之進

同断  
當番座敷ニテ  
堀口勘右衛門

同断  
小屋出口ニテ  
伊東喜右衛門

同断  
杉山與五右衛門

一裏門番人  
足輕小頭  
大河内六郎左衛門

右之通拾三人ハ働キテノ故ニ手負タルニモ

アラス敵ハ六具ヲ堅メヌハカリ此方何レモ

上下共徒スバシナレハ何カワ以テタマルヘキヤ

何レモ疵ヲ被リケルトナン

逐電

上野介  
中小姓  
松村甚五右衛門

此者ハ松平越後守光長卿越後亡ノ刻浪人致

シ候河村與右衛門ト云フ者ノ子ニテ當分輕

キ事ニモ取付申スヘキ由ニテ吉良ハ中小姓

奉公ニ罷出候處ニ如此不慮ナル事出来肝魂  
モ消ルハカリニ思ヒケル扱屋敷ノ内何事共  
不知只物騒々鳴音モ不聞透間ヲ見合彼甚五  
右衛門堀ヲ破リ逃ケルトナリ

- 一 徒士 石原弥右衛門
- 一 同 柳原五郎右衛門
- 一 同 古澤喜右衛門

右ノ四人騒動ノ紛レニ何国ヘカ逐電セリ渠  
ハ當季新参ノ奴原ナレハ主ノ恩愛ヲモ不存  
故也檢使来テ御会議ノ上相見不申由

浅野家来上野小宅口上書一通捨置候事

浅野内匠頭家来口上書一通捨置候事

一 去年三月内匠儀

傳奏御馳走之儀ニ付吉良上野小殿へ合意趣  
罷有候處殿中難逃儀御座候歟及及傷候不辨  
時節場所働不調法至控付切腹被仰付領知  
赤穂城被召上候義家来共迄畏入奉存候請  
上使御下知城地差上家中早速離散仕候右喧  
嘩之節同席御押留之御方在之上野小殿討留  
不申内匠末期残念之心底家来共難忍仕合御

座候對 高家御歴々家来扱詩憤候段憚奉存  
候得共君之離共不可戴天之儀難默止今日上  
野介御宅へ推参仕候偏繼亡主之意趣候志迄  
御座候私共死後若御見分之御方御座候者奉  
願御披見如此御座候以上

元禄十五年桂月日

浅野内匠頭家来

大石内藏助

吉田忠左衛門

原惣右衛門

厅岡源五右衛門

間瀬久太夫

小野寺十内

大石主税

磯貝十郎右衛門

堀部弥兵衛

近松勘六

畠森助右衛門

潮田又之丞

堀部安兵衛



赤垣源藏

奥田孫太夫

矢田五郎右衛門

大石瀬九衛門

早水藤九衛門

間喜兵衛

中村勤助

菅谷半之丞

不破數右衛門

千馬三郎兵衛

木村岡右衛門

岡野金右衛門

吉田澤右衛門

貝賀弥左衛門

大高源五

岡島八十右衛門

武林唯七

倉橋傳助

村松喜兵衛

杉野十平次

門  
守  
當

門  
新  
六  
郎

勝田新九衛門

前原 伊助

間瀬 孫九郎

小野寺 幸右衛門

間 十次郎

奥田定右衛門

矢頭右衛門七

村松 三太夫

神崎 與五郎

茅野 和助

横川 勘平

間 新六郎

三村次郎九衛門

寺坂 吉九衛門

吉田忠左衛門組足輕

右之通り書付吉良ハ腰掛ニ是ヲ捨置付テ翌

十五日ノ朝大目付仙石伯耆守久尚ハ差出ス

ト也同刻吉良左兵衛ヨリ使者糟谷平馬ヲ以

月番之御老中稻葉丹後守正通ハ申上ル口上

之覺

今晚八ツ時浅野内匠家来私宅ハ切入同姓

門  
新  
六  
郎

上野介致殺害候付私立合相働手負申候當番  
之家来拾四五人被討申候狼藉之者深手負  
候者有之候得共引圍立退候故死骸者残不  
申候事急御座候故口上ニテ申上候以上  
右浅野家来書捨ノ一通ト左兵衛ノ注進ノ使  
者ト両様ニ付テ御見分ノ夕ノ御目付衆ヲ被  
遣候

安部式部信旨

杉田五左衛門尉勝行

吉良家来共口書之覚

一御目付兩人参ラレ候ニ付テ事細カニ見分  
其段々其品々ヲ改メ記之時ニ  
左兵衛口上

昨十四日之夜八半時過上野介并拙者罷候宅  
へ浅野内匠頭家来ト名乗候テ大勢火事發来  
ニ相見へ押込申候節長屋ノ方ニケ所へ橋子  
ヲ掛ケ置裏門ノ方ハ扉ヲ破リ大勢押込大鞆  
杯打火消ノ躰ニ仕弓箭鎗長刀杯持参所々ヨ  
リ切込申候家来大勢防候得共六具ヲ堅メ参  
候哉此方ノ家来死人手負有之乱入ノ者ノ千ヲ負計ニテ討留

討留

不申候拙者方へ切込申候ニ付當番ノ家来側  
ニ卧居申候者共防申候拙者刀ニテ防申候處  
ニケ所手負申候テ其節眼ニ血入氣遠ク成暫  
候テ正氣付上野ノ義無心元存シ居所へ罷越  
見申候得共最早討レ申候其後乱入ノ者共引  
取居不申候以上

一上野ノ家老用人口上

五ノ前口上

存藤官内

午ニ 六十四

其ノ前口上

左右田孫兵衛

六十七

其ノ前口上

岩瀬舎人

三十七

昨晚八半時過火事ト申候ニ付小屋ニ寢申候  
者共早ク罷出見申候得者小屋壹間ニ三四人  
宛鑓ヲ持並居申候戸開候テ除キ申者カスリ  
疵請申候依之相扣罷有候其後罷出見申候得  
者最早上野ノ義ハ相果申候左兵衛義モ手負  
申候此外様子不奉存候以上  
一松原多仲御尋ニ付テ申上候乱入ノ者凡一ケ  
所ニカクマリ裏門ヨリ立退申候門ヨリ外ノ  
儀ハ手負倒レ罷有候付見届ケ不申候門脇ノ  
小屋故ノ通りニ候

内 卷 當

一 大河内六郎左衛門申上候乱入ノ者氏手疵負  
申候者共介抱致一所ニ立退申候私共門番取  
ニ手疵負倒レ罷有候ニ付右之様子見届申候  
一 門ヨリ外ノ儀ハ存不申候  
一 吉良左兵衛步行ノ者六人留田五右衛門星野  
八右衛門波谷仁右衛門若松新右衛門近藤徳  
兵衛山下甚右衛門口上申述候昨夜八半時長  
屋ヤ子ニテ騒シク火事御座候由申候ニ付早  
速罷出見申候處鍵ヲ投大勢罷越押掛申候付  
又小屋ノ内へ入申候處ニ其内外ヨリ戸ヲ押

へ押シ不申候何人參候哉其段ハ見分ケ不申  
候禮テ御尋候共此外ハ可申上儀無御座候以  
上  
一 同人足輕春田作右衛門富永次郎左衛門磯六  
兵衛長谷惣兵衛花木市郎兵衛鈴木左衛門  
杉山傳兵衛七人口上  
昨夜八半時裏門ヨリ火事ト申シ大勢入込申  
候我寺共出向申候得者先手ノ者一人鍵ニテ  
ツカレ申候先小屋へ引申候處外ヨリ戸ヲ押  
へ出シ不申候此外可申上儀無御座候以上

門番

一 裏門ノ番人中里仁左衛門口上  
昨夜八半時何方ヨリ入申候儀相知不申候大  
勢屋敷ノ内乱レ森半右衛門ト申傍輩出向候  
得者突投<sup>レ</sup>申候私義ノ門之際ニ居申候得  
者構無之由申候何人參候哉人數程見分々不  
申候此外可申上候思儀無御座候以上  
一同所番人尤山清左衛門口上  
昨夜八半時過裏門ヲ打破リ大勢入乱申候ニ  
向出向候得者鍵ニテ傍輩一人突レ申候拙者  
共兩人ニテ叶不申候故其通りニ仕罷有候尤

何人參候哉見分々不申候此外可申上義無御  
座候以上  
一 齋藤十郎兵衛申上候私義ハ當番ニテ度間ニ  
卧罷有候處大勢切込申候ニ付働手負申候重  
テ手負候故其後働兼申候以上  
一 清水團右衛門申上候小屋ニ罷有候處火事ト  
申候ニ付罷出候得者鍵刀ニテ又向申候付大  
勢故鍵痕刀痕モ負申候然共且那座敷迄罷越  
候處深手故倒レ働成不申候以上  
一 宮石所左衛門申上候小屋ニ罷有處騒動ニ付

内  
啓  
書

罷出候得者小屋ノ内ニテ大勢向手負申候ニ  
付働罷成不申候以上

一宮石新兵衛申上候私儀近習寢番ニテ罷有候  
處大勢切込申候付左兵衛寢間へ参候處大勢

ニテ向申候付相働手負申候以上

一小好新八郎申上候私儀小屋ニ罷有候處火事

卜申候ニ付罷出候得者鑓太刀ニテ及向申候

得共切拔且那近習迄参候處乱入ノ者罷有候

付相働手負申候重キ手故共後働成不申候以

上

一加藤大左衛門申上候私儀小屋罷有候處右ノ

騷ニテ罷出申候處ニ小屋ノ内ニテ手負申候

以上

一永松九郎兵衛申上候近習寢番ニテ罷有候處

大勢切込申ニ付相働申候得共手負申候

一杉山三左衛門申上候私儀屋敷騷申候付罷出

候處小屋口ニ四五人モ罷有及向申ニ付何卜

ソ切又ケ申度存候得共手負申働兼申候

一天野貞之進申上候廣間當番ニテ卧罷有候處

大勢切込申付相働申候得共深手故且那近習

内  
勢  
當

座敷ニテ倒レ申候

一堀口甚左衛門申上候書院近所ノ座敷ニ罷有候處亂入ノ者切入申付相働申候得共手負申候

一伊達喜右衛門申上候小屋ニ罷有候處小屋口ニテ手負働兼申ニ付罷出不申候

一石川秀左衛門申上候右同断

一杉山與五右衛門申上候右同断

一大河内六郎左衛門申上候裏門番ニテ罷出候處大勢罷越座敷ノ内火事有之候間明候様ニ

ト申候ニ付門ノ間ヨリ見申候得者尤火消漿

束ニテ参候得共座敷ノ内ニ火事モ無御座候

ニ付門開不申候所何レモ門ヲ打破リ大勢切

込申候其節ノ漿束火消ノ躰ニ相見入申候私

義罷出又向申候所々疵ヲ被リ申候

一足輕貳人申上候臺所番ニテ罷有候處大勢切

込申候付出向申候得者被疵申候

一門番ノ中間下番ノ者申上候大勢切込申候間

出向申候所疵ヲ被リ申候

右之通りニ御座候尤乱入ノ者共得モ疵負セ



申候得共騒動故委細覺不申候以上

一左兵衛中間頭笠原七左衛門組下ノ中間九拾人何レモ一同ニ申上候口上

午ノ十二月十四日夜八ツ半時何人共不知大勢屋敷ノ内へ押込家来居申候部屋ノ口ニ附

罷有外へ出。シ不申候何人程參候曾テ不奉存候相果候者一人手負罷有候者三人ハ如何

致候テ出向候哉此段モ不奉存候此外可申上儀無御座候以上

亂入之者共持參道具取落置附上野介又子疵之事并隣家口上書之事

一鐘 内脇指仕込四張 貳拾本

一長刀 内脇指仕込四張 六張

一半弓 内半弓一張弦切レ有之 三張尻籠共二

一弓 貳張

一振矢 但袋入 貳拾本

一振矢内 五本ニ茅野幸成書付有  
二本 早水満光書付有 三拾本

一斧 貳拾本

一竹扎名書付 貳拾三本

一掛樋 貳本

一鎰付ノ細引 三筋

一手子

壹本

一鑓

内 壹本 切折有  
三本 十文字

六本

一太刀

鞘一本

一刀 勝守ト有之

白鞘一本

一上野介首ハ見へ不申ムクロハカリ御座候手

痕兩ノ手ノ内一ヶ所宛左ノ股ニ一ヶ所右ノ

膝頭ニ二ヶ所同ムヲ一ヶ所御座候由家

来申候也右上野介刀無銘ニテ長廿二尺三寸

柄ニ切込有之但此刀所ニ血付アリ脇指ハ

見へ不申候由家来存藤宮内岩瀬舎人左右田

孫兵衛申上候

一左兵衛手痕ヒタイニ一ヶ所後ニ七寸程ノ痕

一ヶ所有之也

一同人向屋敷駿河在番酒井壹岐守忠篤組牧野

一学某ノ家来茂木藤兵衛口上書

昨夜セツ時分火事ニテモ有之候歟方々ニ人

聲致シ候故罷出見合候處吉良左兵衛様御門

之内聲高ニ相聞へ申候得共様子知レ不申候

ニ付手前ノ門外ニ扣人附置罷有候處其以後

何レ物騒敷跡モ無御座候故其通ニ仕置此可

申上儀無御座候以上

一十文字鍵

技身ニテ

一山鳥羽矢

但矢ノ振無之

一鍵鞘

五本

一札

浅野内匠頭家来  
村松三太夫卜有之

貳枚

右ノ通一学屋敷ノ門前ニ捨置候テ有之由

一左兵衛屋敷隣土屋主稅達直口上書

昨夜七前隣家吉良上野介屋敷騒シク候間火

事ニテモ候哉卜存罷出兼リ候得者喧嘩ノ躰

ニ相聞ヘ振慮ニ家来ヲ召連レ境迄罷出堅々

候テ罷有候得者堀越シニ聲ヲ掛ケ申候ハ浅

野内匠家来厅岡源五右衛門小野寺十月原惣

右衛門卜申者ニテ候哉々ハ遠回ノ者ニテ上

野介ヲ見知不申候哉間目明カシノ者ヲ證據

ニ致シ只今上野介ヲ討捕達木望由名象申候

堀越ニテ兼申候夜明前裏門前ニ人数五六拾

程モ罷有候様ニ相見工申候尤火事聚束之様

ニモ見ヘ申候暗ク候テ暇卜見留メ不申候此

外何ニテモ不存候以上

一上野介卜右土屋主稅屋敷隣リ松平兵部太輔

内  
啓  
書

昌親ノ臣木多孫太郎正頼カ家来真柄勘大夫  
卜申者、口上

昨夜七時何トヤラシ物騒御座候ニ付罷出候  
處吉良左兵衛様御内殊ノ外騒キ申候火事杯  
ノ様子ニテ御座候得共取ト知レ不申候其内  
鳴モ静リ申候其節ノ儀曾テ様子不奉存候以  
上

吉良左兵衛配流信州并吉良代々知行之事  
一吉良左兵衛義周ハ去ヌル元禄十四年十二月  
六日祖父上野介義英ノ讓リヲ受四十二百石

ヲ領シ高家寄合ノ列ニ勤ルノ所ニ兼テ此共  
思ハレヌ夢カ虚カ不意ナルハ時節天命此ニ  
来ル哉午ノ十二月十四日ノ晩ハ如何ナル天  
魔ノ責ケルカ父上州首ヲ失ヒ其従士數多被  
討シハ不便ナリシ次第也此時左兵衛モニケ  
所ノ手痕ヲ負被申候故翌年末ハ二月四日荒  
川丹波守定昭ト猪子左太夫正與ト兩人左兵  
衛同道ニテ評定所へ出ラレケレハ大目付仙  
石伯耆守久尚江戸町奉行丹羽遠江守長守ヲ  
始同役三人御目付長田喜左衛門尉重昌出座

町  
啓  
書

ニテ上意之趣

浅野内匠頭家来上野八討候節左兵衛仕形  
不届ニ付領知被召上之諏訪安藝守御預被  
成之旨是ヲ仰渡サル也

右之通りナリシカハ信州諏訪高島城主諏訪  
安藝守忠虎屋敷へ引取り急キ道中支度有之  
由扱又支度無程出来シケレハ同十一日左兵  
衛今年十八歳信州へコソ急カレケル尤兵衛  
家来左右田孫兵衛山吉新八郎此二人御免ヲ  
ヲ蒙リ願ニ依テ供致シ候由

一吉良代々三州ノ地是ヲ知行セラル事先祖足  
利左兵衛尉長氏始テ三州幡豆郡之内西尾城  
ニ居住シ長氏ニ男子二人有之婿男吉良三郎  
満氏トテ後上総介ニ任セラレ則満氏ヲ以テ  
吉良ノ元祖ト云フ次男今川四郎國氏ト称ス  
是ヲ今川家ノ鼻祖トナス何レモ數世相統シ  
猶將軍ノ代々ニ奉仕既ニ吉良今川ノ名ヲ天  
下ニ振シタル所也正ニ吉良氏ハ人王五十六  
代清和帝ヨリ世七代目ニ當テ断絶ス於此吉  
良ノ称号一人モ無シ子細ハ吉良氏惣領ハカ

リ是ヲ名乗ル故ト云々具ニ此書之末ニ記之

ノ間略シ畢

知行目錄

三河國

幡豆郡

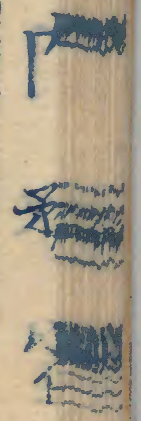
吉良村

郷場村

高三千貳百石

上野國

緑楚郡之内白石村



碓氷郡之内人見村

此三ヶ村ノ高千石

都合四千貳百石

吉良先祖正統之事

一吉良ノ先祖ヲ尋ルニ清和源氏之流八幡殿ノ

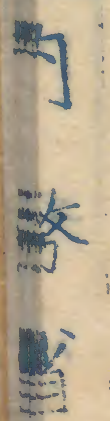
御子足利式部太輔義周ノ次男足利新判官陸

奥守義康ノ新田義重ノ弟也義康ノ曾孫足利

左兵衛尉長氏ト称シ病氣故三州幡豆郡西尾

城ニ居住ス長氏男子二人アリ一男ヲ吉良三

郎上総介満氏ト号シ從五位下左兵衛尉ニ改



又西尾ニ居住アリニ男ハ今川四郎国氏ハ父  
長氏隱居料トシテ三洲今川村ヲ領ス故ニ国  
氏ヨリ以来今川ヲ以子孫是ヲ相統スト云云  
満氏ノ男吉良弥太郎上総ハ貞義西尾ニ居城  
後左京太夫ニ改ム其子三郎満義左京太夫ニ  
被任昇殿シテ正三位左兵衛督ニ進ミ延文元  
年病死満義五男有一ハ吉良三郎左兵衛督満  
貞トテ從四位下左京太夫ニ任シ尊氏舍弟直  
義ト兄弟不和ノ時満貞尊氏ニ叛キ直義ニ属  
シ軍功有ル由ニハ一色四郎左馬助有義ト

称シ三洲幡豆郡一色村ニ居住云以吉良ノ一  
色ト云子孫アリ三八東條中務太輔尊義トテ  
是東條ノ祖也四ハ岡山六郎満康五ハ橋田八  
郎満長也ト云ヘリ但東條朝氏尊氏嫡男代友切丸  
ノ目貫化ノ龍トナリ川ニ入ト云云吉良満貞  
ノ長子左兵衛督俊氏從四位下ニ叙シ細川山名  
合戰之時將軍義尚ノ味方ニ参リ細川勝元ニ  
属シ功アリ俊氏子三郎左兵衛佐義尚トニ室  
町殿ヨリ一字ヲ賜ル其子義真左兵衛佐從四  
位下叙任セテレ菩提所遠刈普濟寺ニ位牌有

内務省

之由義真男義信義元義堯三代武衛ト号ス義  
堯三子アリ惣領吉良左武衛義郷ハ天文ノ頃  
尾州ノ敵来テ西尾城ヲ攻ムル時ニ防戦シテ  
討死畢ニ男三郎上野介義安ト号シ始東條武  
衛持廣ノ婿養子トナリシガ吉良ノ惣領討死  
ニ依テ吉良ニ戻リ本家ヲ繼テ弘治二年東條  
善明ノ合戦ニ松平大炊助好景以下悉ク討捕  
功アルノ由又舎弟義昭東條ノ城主タリ永祿  
七年西尾落城シテ江州ニ往佐々木義賢入道  
義禎ヲ頼ミ京都芥川ノ軍ニ討死ス義安子左

衛門佐義定後上野介ニ改メ寛永四年九月十  
九日六十四歳ニテ卒去妹氏真ノ子全川左馬  
頭範以女ヲ以テ妻トナス由義定男三郎義彌  
ト称シ慶長二年始テ秀忠公ニ相謁シ奉リ同  
五年関ヶ原御陣ニ供奉同十三年從五位下侍  
從上野介ニ補任セラレ同十六年從四位下ニ  
叙ス元和九年冬左衛權少將ニ任シ寛永二十  
年十月廿四日京都ニ於テ卒去長松寺殿ト謚  
ル其弟荒川山城守定安元和五年明曆二年マ  
テ勤候今年病死子孫アリ義彌ノ長男三郎義



冬若狹守ニ任シ從四位上少將ヲ兼ヌ寛父八  
年三月廿五日六十二歳ニテ病死弟岡山八兵  
衛尉彌清ハ寛永十五年ヨリ大猷院殿へ御奉  
公ニ罷出候テ子孫相續ス義冬ノ子上野介義  
英ナリ是清扣天皇ヨリ七代目ニ當テ吉良  
一名ノ嫡家断絶ト云云 同外ニ平賀五郎可成  
義英舍弟何レモ東條ヲ称スル也 同外ニ平賀  
右ノ外上野介ニテ吉良名字絶へ申候トナリ  
去ハ上州ノ譜ハ委細易水連袂録ニ見入タル  
故此ニ略畢 同外ニ平賀五郎可成

續盛衰記卷之二十三終

内務省

續盛衰記卷之七四

目錄

最上之老臣鮭延松根指岡始末之事

長州家臣阿曾沼氏出頭之事

黒田家臣東山氏事

長州家臣福原氏忠孝之事

松平但馬守寵臣土戸氏立身沉浪之事

松平越後守家臣小栗氏之事并小栗先祖由緒事

有馬金吾家臣有馬氏事

奥州家臣古内氏出頭盛衰之事

松平遠州家臣安藤氏奢侈生害之事

阿州家臣加島氏事防鎌倉氏満善政之事

阿州家臣加島氏事防鎌倉氏満善政之事

阿州家臣加島氏事防鎌倉氏満善政之事

阿州家臣加島氏事防鎌倉氏満善政之事

阿州家臣加島氏事防鎌倉氏満善政之事

阿州家臣加島氏事防鎌倉氏満善政之事

阿州家臣加島氏事防鎌倉氏満善政之事

阿州家臣加島氏事防鎌倉氏満善政之事

阿州家臣加島氏事防鎌倉氏満善政之事

續盛衰記卷之廿四

最上臣鮭延松根指岡妹末之事

一羽州ノ大守前取上駿河守源家親ト申ハ七次

出羽守義光ノ遺跡相續アリ五拾万石ヲ領シ

則最上山形ノ城ニ居住セラル又譜代從侍ノ

家老指岡甲斐ト申依者知行一万六千貳百石

ヲ領シケル松根備前ハ一万二千石鮭延越前

一万千五百石ヲ領スルナリ此外取上ノ家来

大身ニハ四万五千石木莊豊前ヲ頭トシテ次

ハ三万石志打伊豆其次ニ貳万七千貳百石寒

内務省

川肥前貳万七千三百石兵部貳万石野邊沢遠  
江其外一万九千三百石山野辺右衛門ヲ始ト  
シテ一万石滝沢兵庫マテニ万石ノ家来拾五  
人共ヨリ八千石ヲ高ニシテ千石マテ段々ノ  
従兵五十人都合家中へ出シ置ル、所ノ知行  
高四拾一万三千五百三十石ナリ誠ニ今時ノ  
大名無之昔ハ如此ト見ヘタリ去ハ最上氏往  
昔清和源氏ノ流足利左馬頭義氏ニ四代足利  
出羽大掾修理太夫兼頼ノ時延父ノ初奥州ヨ  
リ羽州ニ移シ最上山形城ヲ築キ子孫代々居

住トナシ最上ト称ス兼頼ヨリ九代最上出羽  
守義守トテ世々相續アリ四位少将ニ進ム其  
子出羽守義光ハ天正文録ノ比ニ到テ大関秀吉  
ノ幕下ニ屬シ本領安堵令ノ貳拾五万石ヲ領  
セラル秀吉没後御當家ニ奉仕忠節ヲ盡シ軍  
功ヲ抽スルノ間御厚恩ニ預リ大禄ニ座シテ  
後六十九歳ノ時卒去畢依之駿河守家督ニ忠  
勤ヲ励ス。ハ前ニ元和三年三月六日三十六歳ニテ願死昨日鷹野ニ出ラレ帰リニ家臣  
指岡甲斐カ宅ニ立寄餐應アリシカハ家親俄  
ニ氣分悪敷ク罷成早々帰城ノ後翌日死去被

致候トイヘ凡此儀先内々ニテ誰云者モナカ  
リケレハ潜ニ家督ハ今年十二歳ノ源五郎義  
俊ニ相續ヲ願ヒ奉リ則亡父駿州ノ遺跡ヲ被  
下源五郎末夕幼弱ナレハ臣等國家ノ政道執  
行ヒ三四年別義ナカリシカ六年目ニ到テ松  
根備前ト申者公義へ訴へ申ケルハ先年駿河  
守存生ノ時兩度御暇被下在国仕リ候處ニ家  
来指岡甲斐ト申者ノ方へ鷹野帰リニ立寄食  
物等ヲ被下候ヘハ俄ニ氣分惡敷罷成翌朝頓  
死仕リ候ニ付テ毒ヲ飼申候由御老中何レモ

酒井雅樂頭宅へ列座アリ御穿鑿ヲ遂テル所  
ニ備前儀證據無之由ヲ申上ルハ間源五郎若  
輩ニテ候ヘ凡義光家親ニ代無ニ忠功ノ者ニ  
候ヘハ源五郎ヲ守立申候様ニト家老分ノ者  
共へ仰渡サレ候然所山野辺右衛門鮭延越前  
西人御請不随候ニ舟島田彈正忠守利米澤勘  
兵衛尉由正西人ヲ上使トシテ弥源五郎ヲ守  
立可申旨是ヲ被仰付時ニ右西人又申上候ハ  
唯今御請申上候テモ已表松根備前同志ノ者  
罷出公事ヲ發シ申候ヘハ御請申上候甲斐モ

無之候後日不届ノ義ニナリ申候間拙者西人  
義ハ御暇被下候様ニト頻リニ願ヒ申上候ニ  
付テ然ル上ハ若輩ノ源五郎ニ老臣無之過分  
ノ領知被下置候如何ニ候先當分領知召上ラ  
レ候生長仕候テ一分仕置等ヲモ申付候時  
分領知返シ可被下ノ由仰渡サレ候其間御合  
カトシテ江州三州ノ内ニテ五千石宛一ノ石  
被下之ノ旨ナリ此ニ於テ最上家累世相續ト  
イヘ元元和八壬戌年九月彼臣等カ為ニ没ス  
心也

按ニ彼指岡甲斐ト申者モ義光先祖最上修理  
大夫満家ノ弟指岡伊豫守満国カ末ナリ羽州  
指岡ニ居住故ニ称号トス又山野辺右衛門義  
忠ハ則源五郎祖父出羽守義光ノ四男ニテ家  
親ノ舎弟ナリ源五郎為ニハ眼前ノ伯父ナル  
故ニ甥未夕微若旁々何トソ最上ノ本家ニ可  
成歟ト思案工夫ノ床ニ伏シ彼指岡ヲ頼ミ味  
方トナシ駿河守ヲ毒飼セシ由人々推量令ム  
トナリ是皆貪欲無道ニ暗マサレ惡逆ヲ起シ  
善ニハ遠ク惡ニハ近キ世ノ習ヒニテ遂ニハ

積悪ニ引入テレ主君ヲセシ已モ亦滅スルノ  
類ヒ古今ニ有之ナリ去ハ今指岡カ謀計露頭  
セルニヤ又ハ松振備前カ能共事ヲ知ニヤ今  
茂御請申上井ル故竊上家大ニ衰弊ニテ漸ク  
五拾万石ハ知行ヲ一万石ニナシケリ是何レ  
モ忠義ノ臣ト云ハシヤ情ナキ所存哉ト申侍  
ル依テ右ノ松振ハ伊達遠江守秀宗ハ御預ケ  
山野辺ハ水戸殿ハ御預鮭延ハ土井氏利勝ハ  
御預ケ氏家左近ハ松平長門守秀就ハ御預ケ  
其外ハ者凡ヲモ諸所方々ハ御預ケアリシ也

ナリ右御預ケノ者共後々皆其家々ハ御家来  
トソナリニケル  
長州ノ家士阿曾沼氏出頭之事  
一防長二州ノ大守毛利ノ松平長門守大江秀就  
ノ家士阿曾沼因幡ト云者有之渠長州ノ心ニ  
叶ヒ出頭日ヲ追テ盛シナリシカハ其レニ隨  
ヒ恩禄ニ預リ高五千石ヲ領シ妻子安樂ニ養  
ヒ已上ヘミ又驚ノ振舞不禮緩怠多ク且奢リ  
第一ニシテ唯其身モ直ニ主君長門守殿思フ  
程ノ威勢ニ諸人恐レ途中ニ出合候節ハ頭ヲ

地ニ付平伏シ尊敬他事ナク致シケル故ニ後  
々ハ一家中ノ者共モ何トソ因幡カ言葉ニ懸  
リ度ナト、思ヒケル由或ハ因幡ニ入魂ノ者  
ハ言葉ニ懸リタルヲハ是ヲ大守長門守ノ御  
言葉ニ掛リタル様ニ存シ難有思ヒシ程ニナ  
リニケル然ル間因幡ニ詞ヲ被懸タル者ヲハ  
羨歎キ事ト申ケル此故ニ家中ノ善惡出来  
毛判家ノ古法録モ破レ捨レル様ニナリシカ  
ハ譜代旧臣ノ者共相談ノ上連判ノ一通ヲ書  
上秀就ハ是ヲ捧ケ因幡義我々ニ被下置候様

ニト頻リニ願ヒ申ケレハ長門守寵愛ノ阿曾  
活ナレハ勲負第一ニ思召シ家老共願ノ義尤  
ナレ用捨ヲ致シ候ヘ重テ侈ラヌ様ニ可申  
付杯ト仰セラレシカ臣等免角ニ是ヲ惡シ古  
法ニ背キ其上家中以後ノ為旁々候間彼者義  
拙者共ニ被下置候様ニト連テ願ヒ申ニ付テ  
終ニ家老共カ肯ニ任セラレシカハ彼因幡ヲ  
押込メ暫有テ君ノ御意如此次ニハ我々存ル  
處如此ニ候ト段々ヲ申會ノ異儀ナク切腹致  
サセケリ又因幡嫡子阿曾活山之助ト申ニモ

内務省



腹切セ候由山之助ハ其比十三四ナリト云ヘ  
リ去ハ古今出頭人有之ナレモ其身ノ心得ヨ  
ク或輕ヨリ上リ候者ハ其振ヲ不忘君ノ寵愛  
ニ隨ヒ万端慎ミ多ク禮ヲ盡シ仁ヲ尊ニシテ  
旧臣等ニ能シ下々ヲ撫育シ天理ヲ存シ君ニ  
忠ヲ抽シ身ヲ能治ノハ何ノ失ツ歟ア方ン哉  
黒田家臣粟山氏之事後改筑前守光文父ノ臣  
一筑前大守前松平右衛門佐忠之  
粟山大膳ト云者アリ食邑万石余ヲ賜リケル  
由或時粟山如何思ヒケルヤ主君忠之ノ御為

トテ諫言ノ箇條一通認之抹ケシカ外ノ老臣  
及近習ノ者共頭立タル分合十七八人筑前守  
殿ト一致ニナリ大公事ニ罷成リ相互ニ感勢  
ヲ争ヒ牛角ノ如シ既ニ内々ノ詮儀不叶シテ  
終ニハ公義へ訟ヘケル時ニ御老中内評定區  
々ナリトイヘモ是モ下ニテ不濟ハ將軍家光  
公へ言上ニ及ヒシカハ殿中ニ於テ御前對決  
アルヘシト仰出サレケレハ弥其レニ究リ時  
日移リケルノ間筑前守モ家来共ト公事ヲ結  
ヒ且公義御前ノ沙汰ニナリシ故少々遠慮有

之上屋敷ヲ明ケテ溜池ノ端ナル中屋布へ移  
リ其上世間ノ一類中へ参ラレ候節二本道具  
對ノ狹箱ヲ減シ一本道具一ツ狹箱ニテ勤メ  
ラレシカ何トソ利運ニ成候ヘカシト存セラ  
レ潜ニ忍々勤メ被申ケル由扱又粟山大膳跡  
公南部氏へ御預ケトナリ扱筑前守モ大膳カ  
公事不誤ニ於テハ身上ノ程難計所ニ如此埒  
明大悅不斜シテ安堵ノ上向後一本道具厅狹  
箱ヲ吉事ナリトテ此筑前守忠之以来用之也  
按ルニ黒田家元来士臣安座セサルト云リ去

ハ古甲斐守孝高入道如水ノ時代物骨ヲ盡シ  
ケル井上半右衛門ト申者ニ万石ヲ領シ代々  
勤メシ所ニ高ノ内貳千石ヲ取上被申ケレハ  
井上是ヲ憤リ君臣既ニ不和シ主君ニ不謁シ  
カハ主ノ右金吾或時兎姓上リノ黒田三左衛  
門ト申者ヲ使トシテ少々氣色快ク有之候ハ  
罷出候ヘト仰セ遣ハサレケレハ自分父祖  
ノ軍功忠義ニ依テ取来ル處ノ高ヲモ減シ被  
申シ故別ツニ喜フ事無之由ヲ存シ彼三左衛  
門ヲ能ニ饗應シテ公義へ罷出テ右ノ箇條申

均  
寄  
旨

問テカント存シ極ノシカ畢竟大膳主君ト公  
事ヲ致シ候事不義無道ノ至リ言語同断ナリ  
縱令十分ノ利アリトモ主人ニ對シ如此御前  
公事ニ及ブハ大膳日來ノ恩愛ヲ忘却スルカ  
或主君筑前守ニ恨ミ有之ヤ如何其意難計ナ  
リ斯テ此儀主ト被官ノ公事ナレハ双方善惡  
落着候トモ不直ノ間粟山カ一族某大膳ニ申  
ケルハ我等一類ナレトモ今度ノ儀ニ於テハ貴  
殿ノ味方ヲ致スマシテ子細ハ大膳十分ノ打ア  
リ氏主君ニ對シ公事ヲ結フ事世間ノ取汰

自己ノ愚意ナラシ批判モ氣ノ毒ナリ兎角  
理ヲ非ニ負テ誤リ被申候ヘト頻リニ諫言セ  
ラレケレハ大膳モ能ク思案ノ上尤ニ存シ夫  
ヨリ御穿鑿ノ刻ミ右ノ通り誤リ奉ルノ由ニ  
テ落着相濟候テ後粟山ハ奥州へ帰其後古來  
ハ老臣見舞ノ為ニ來テ申ケルハ左様ニ主君  
ニ對シ鬱憤ヲ合ニ被申候テハ家ニハ被居間  
敷候所詮身ヲ退ヨリ外ハ有マシト申ケルニ  
付テ家ヲ潜ニ立退京都ノ側ニ住居ノ由其後  
モ歩行人者杯ヲ取上家老ニ申付テラルトナリ

夕 寮 旨

此家ノ風ニハ洩マレタル事ト云ヘリ  
長州臣福原氏忠孝之事

一松平長門守吉就周防長門ノ寵臣福原隱岐ト

申者元来先祖主君ノ系圖別レバ人ナリ古ハ

安藝ノ福原ニ住セシ故子孫毛利家呼テ福原

殿ト申候由吉就家督ノ後彼福原當番ニ在

江戸タルノ時踏銀江戸扶持相渡ルトイヘ氏

是ヲ不受自分ノ賂賄ニテ懈怠ナク相勤ム時

ニ八九年ニ及フ其間ニ主君吉就ヘ所々ヨリ

来ル音物進上諸色出入ノ町人ニ拂ハセ其金

銀ヲ集メ又出入ノ兩替町ヘ借置年々利金ト

マリ既ニ三千貫ノ余ニナリシヲ取寄納戸役

ノ者ニ申付自然御用ノ節ハ何ニ成凡遣ヒ候

ヘト申渡シ其身ハ番明在所ヘ下リ申候此時

右ノ勤ノ金或ハ役料等且脇差一腰賜リケル

ニ役料勤金ヲハ請取不申彼御脇指ヲハ戴キ

在所ノ土産ニ致シケル由

按ルニ福原氏八千石ハカリノ知行ヲ代々申

受ル故君ノ軍役ニ江戸詰致所ニ其役料ニハ

及フマシ我等常々安樂ニ暮シ其上宝物ヲ身

上相應ニ所持シケルハ是皆主君ノ御影故ナ  
リ然ル上ハ其役料ニ不及トテ受納無之由扱  
々道有仁ナリト一家中ニ掃レ者ト申ケル  
也

松平但馬守寵臣土戸氏立身沅浪之事  
一越前家ノ藤流松平但馬守直良トテ越前国大  
野城主ニテ五万石ヲ領ニ給フニ世人舉テ荒  
人神ノ様ニ申ケル由爰ニ其臣土戸加右衛門  
ト申者知行五百石ヲ賜リ但州ノ氣ニ入無ニ  
ノ出頭家老ナリ渠ハ元來遠州出ノ由若年ノ

時分四回豫州松山城主松平隱岐守定行ニ仕  
ヘ小姓立ニテ有シカ彼家ヲ出テ中年但州公  
ニ召抱ヘラレ其身利根發明故<sup>段</sup>々立身致シ  
留守居役トナリ又家老ニ申付ラレ誠ニ君臣  
合躰シテ他ニ異ナリ且暮勤ノヲ勵シケル但  
州モ亦此土戸ノクテハ不叶<sup>テ</sup>脱ト思ヒケル  
程ノ會口ニテ公義御用ノ義此加右衛門ニ被  
申付候故御老中ヲ始ノ諸役人方マテ<sup>モ</sup>加右衛  
門ハ御存知ノ由就中先年松平權藏ノ事ニ付  
テ主ノ但州ト加右衛門トハ大ニ骨折大儀セ

守  
務  
目

テレシト也去ハ盛シナレハ衰ルト云ヘル如クニヤ但州齡ヒカクムキ七旬ニ余リ卒去畢加右衛門身ニ取テノ悲歎云フニ不足自是後松平若狹守直明ノ家督ニナリシカハ加右衛門事休足ト号シ妻子ヲ引連レ越前国大野ノ城下ニ移リ暫ク住シケルカ第一若州ノ心ニ不叶故ナレハ此以後何レ越度ノ有ニ時切腹ニモヤ申付テルヘキト察シケルコソ尤ナレ角テ加右衛門暇ノ儀頻リニ願フ所一圓均明不申年月重リ後ハ御一家方々奉歎漸々

暇ヲ賜リケル勿論自今奉公不成其外所々ヲ被搆シカ加右衛門妻子引連江戸ニ来リ子共數多有之限々困窮シテ子共所々へ不置カタ付我身ハ出家シ其名ヲ土戸休閑トソ申ケル謠仕舞ノ上手ニテ渡世ノ多足ニモナリシ由也  
松平越後守臣小栗氏事并小栗先祖由緒事  
一越後三位中将光長卿ハ越後国高田ノ城主ニテ知行高代六万石ナリ其臣小栗五郎左衛門尉正矩トテ食禄一万石ヲ領シ且亦光長卿ノ

御妹於寒ヲ小粟ニ嫁シ玉フ所嫡子小粟大六郎  
ヲマウケタリ是光長卿實ノ甥ナリシ故殊ノ  
外奢侈ニ慕リケルトナリ去ハ大六成長ニ隨  
ヒ正率逆意ヲ企シカバ越後家中大ニ騒動シ  
テ小粟方萩田方御為方杯トテ三ツニ分レケ  
ルコソウタテケレ斯テ年月積リシ程ニ今ハ  
早天和ノ始ノ大ニ破レ家中安座セサリシ所  
ニ段限々頭々ナケル者共江戸へ召上ナレ御穿  
鑿ノ上御前ニ於テ對決ニ及ヒ其理不正ニヨ  
リ遠島或ハ御預進放仰付ラレ扱小粟父子非

義無道ノ科遁レカタク重罪ノ者ナレハトテ  
松平越前守綱昌へ御預ケアリ遂ニ彼宅ニテ  
斬罪セラル也此中將日來柔弱タル故國家  
ノ政道緩急ニシテ万事小粟ニ任セ玉ヒシカ  
ハ彼レ其心意ヲ會テ以謀ル所ノ患逆争ク天  
命ヲ遁シ哉ト世ノ人口ニアユルモ理ナリ  
按スルニ彼小粟氏ハ三列出入者テ先祖ハ桓  
武ノ後常陸大掾国香ノ末孫多氣常陸大掾繁  
幹ノ五男小粟五郎重義ハ常州真壁郡小粟ノ  
地頭ニテ別小粟ヲ称号トナシ世々相續アリ

應永年中小栗十郎忠幹始テ三州ニ到リ子孫  
相續シ御嘗家御先祖以來仕人奉リ小栗左京  
亮忠政ト云シ人ノ子共代々續キ来リテ小栗  
五郎左衛門子大六郎事後又五郎左衛門正矩  
ト申ケルカ遂ニハ主君ノ家共ニ滅シケルナ  
リ今御族本ニ有之小栗氏皆此末流ノ由然ル  
ニ又源姓ノ小栗ナト存セラルモアリ是  
大ニ非タル由源氏平氏ノ相違<sup>其</sup>モ理ナキニモ  
アラス委細諸家系圖百丹ト御族本系圖五十  
丹ニ相見ヘシ也

有馬金吾臣有馬氏事

一日向国縣城主有馬左衛門佐藤原直純へ昔純  
友ノ末苗ニテ中興以來先祖代々有馬左金吾  
ト称シ名譽ノ家ナレ共當代金吾直純ニ到テ  
少々不行跡ニモヤ小見姓上リノ有馬四郎右  
衛門義長トテ出頭盛ナリシ後家老職ヲ申付  
テレ国政ヲ專ラニ執行フ所ニ義長侈リニ長  
シ巴カ事而已ニカハハリ君ノ御為ノ宜キ様  
ニトテ百姓ヲセタケ取テ私用ニ募リシカハ  
諸人ニ疏マレ民ノ歎キヲ蒙リ天命ヲ不存主



君ノ心ニ叶ヒケルヲ笠ニ著テ不禮緩怠カキ  
リナシ我儘ナル仕置シケレハ百姓連判訴訟  
致シ内々ニテ埒明不申ニ付テ公義御代官所  
へ奉願其ヨリ江戸ノ沙汰ニ及ヒ評定相究リ  
彼出頭家老四郎右衛門事切腹申付テ其外  
仕置被致ケル由斯テ主ノ左衛門佐ハ縣ノ旧  
領召上テレ越後国頸城郡ノ内へ本高五万石  
ニテ所替仰付テル、ナリ數代ノ旧領ニ離レ  
弥身上困窮セラレシトナン其後越前国丸岡  
城へ本田五万石ニテ所替アリ去ハ主君タル

人老臣ハ先祖代々相續シ来ルヲ以寵臣トス  
ヘシ然ルニ世間共ニ俄ナル出来家老ニテ四  
分六分ハ家滅スルト見ヘタリ殊ニ大家ハ猶  
更能々慎ミ政道正シク民ヲ撫育セスンハ不  
可有也

奥州家中古内氏出頭盛衰之事

一前ノ松平陸奥守綱村ノ出頭人ニ古内酒造助  
重直トテ本知行四百貫上方知行ナリ後ニ  
々寵愛ニ隨ヒ加恩ヲ賜リ立身スル程ニ千六  
百貫欠上方物成ニテテ領シケル故ニ上へ見

又驚ノ振舞ヤラシニテ大ニ家中右往左往ニ  
騷キケリ扱又古内カ心ニ叶ヒシ者共ハ取立  
候テ不和ナル者ヲハ進退ヲ召放シ様々所行  
不道ニ不憚色々ト君ニ勸メケレハ君又其勸  
ニ引サレテ網打卿座禪ノ床ニ眠テ醒シ在国  
ニハ山野ノ狩ヲ止一向出家ニ同ク家士民間  
ノ仕置悉ク緩急アリ或在江戸ノ節モ右ノ通  
リニテ目黒ノ紫雲山瑞聖寺ノ和尚鉄牛ノ法  
ヲ因ニ殊外帰依セラレシカ又在国ノ後舅拙  
業美濃守正則ノ勸ニヤ黄檗派ノ僧大寶首主

奥州仙臺へ下向シ彼古内カ宅ニ在リ時々網  
打ノ前ニ出テ何ヲカ勸メ申ケルヤ或時春ノ  
彼岸二月十日ノ入日ニ吉成山ヲ狩セ鹿ヲ打  
事ニ千余其外ノ四足數ヲ不知トナリ自是国  
政荒ニ近年中絶セシ仕置俄ニ申付ラレケレ  
ハ誠ニ久シク緩急タルノ間士民ノ小罪有之  
ヲモ悉ク斬罪セラル故ニ国江戸共ニ家中勅  
キ騷シキ由既ニ奥州公ハ乱氣致サレハ杯ト  
沙汰シケリ皆是彼古内カ所為ナリト後ニソ  
思ヒ當リケル扱網打ノ門業伊達安藝宗重ト

号シ奥州脇屋城ニ万五千石ヲ領スルモ、彼  
古内カ積悪一々書付ケ奈ヲ以諫之、遂ニハ古  
内ヲ押込加増ノ地ヲ取上其上閉門申付旧領  
ハカリニテ一生ノ間蟄居ス是皆侈リ盛ニ成  
者ハ久カニサルト云ヘル如クナリ此後国家  
暫静謐ト云云

松平遠州、臣安藤氏奢侈生害之事

一信州飯山城主松平遠江守忠喬ノ家臣安藤惣  
太郎ト号シ千石ヲ賜リ四万石余ノ權柄ヲ取  
テ国家ノ仕置雅意ニ任セケレハ士民悉ク難

義ニ及フトトイヘ凡誰有テ上ヘ訟フル者モ十  
ク日々夜々ニ侈リ強ク其威盛シニメ古老ノ  
臣等ハ閑居ノ躰ニテ彼安藤氏カ所行ヲ考ヘ  
空ク年月ヲ送リケルトナリ夫レ上ニ立テ下  
ヲ執行フ者ハ先其身慎ミ多ク有智隱徳仁心  
深ク民ヲ勞ハリ下ヲ惠ミ無偽不奢不貪君ヲ  
全フ令ノ家永ク子孫ニ到リ君臣共ニ相續ナ  
ラン事ヲ執行フヲ臣ノ道ト云フ皆今時ノ先  
臣ハ多クハ盜臣ノ類ナルヘシト云ヘリ子細  
ハ我々先祖以来君ノ重恩ヲ請祿ヲ食ミナカ

う私用ヲ重シ公用ヲ輕シスルカ故ニ天命盡  
テ終ニハ其身不全ナリ君々タレハ臣々タリ  
ト云ヘル本文アリ能々君臣合躰シテ國家ノ  
政道正ク父祖先祖ノ名ノ繁栄ナラン事ヲ專  
ラニスヘシ去ハ此安藤モ後ニハ遠州ノ御心  
ニ叛キ一門中相談ノ上御老中へ断リ終ニ切  
腹申付テレケル由斯テ家治リ家臣モ亦世ニ  
出シトナン

阿州臣加島氏事附録倉氏滿善政之事

一四国阿州ノ大守松平淡路守綱矩ノ臣加島主

水今年十七歳ヨリ家老ノ列ニ備リシトナリ  
是若輩ナカラモ其器量有之ニ依テ其列ニ入  
リ勤之トナリ  
按ルニ首録倉ノ氏滿ハ左馬頭ニ任セラレ管  
領職ニ補シ永和元年ノ夏十七歳ニシテ始テ  
評定所へ出座アリ東国ノ政事ヲ直々沙汰シ  
玉フニ私曲ヲ禁シ邪欲ヲ制シ廉直ノ裁許ヲ  
事トシ上ニ賄賂ノ蠱負ナク下ニ追従ノ音物  
モナシ唯慈悲ヲ面トシ刑罰ヲ衷ニシ諍論有  
之時ハ對決ニ及ヒ其批判道理分明ヲ究メ勝

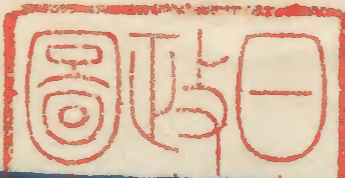
負ヲ分ツ故ニ負レ共奉行ヲ不限勝共不詭頭  
人或入訴訟ノ者有之ハ共非ヲ糾明シ是ナル  
ヲ揚ケ非ナルヲ捨テ奉行頭人評定衆面々相  
互ニ心身ヲ磨私ヲ去リ欲ト愛ト親ト疏トヲ  
忘レテ自モ他モ平等ニシ其正ト其理トヲ執  
テ評定ヲ落着ストナリ是偏ニ長井掃部入道  
カ一人ノ所為ヨリ締起レハ残ル評定衆モ他  
ヲ耻巴ヲ慚ミ政道ヲ糾ス大概ハ北條武藏守  
泰時貞永ハ式目ヲ以矩規トナス也故ニ諸民  
愁ヲ懷キ憤リヲ含ム者ナカリケリ執事上抄

憲春又生得極信ニ御座スル人ナレハ長井ニ  
不劣道ヲ守リシニ依テ斯正道ニハナリシト  
カヤ

一應仁ノ比將軍義政ノ時熊谷平次郎直重ト云  
フ者アリ渠レ智徳有テ仁心深キカ故ニ民ヲ  
勞リ下ヲ撫勇アレ凡不猛有信無偽有禮不奢  
文武ニ達シ又世人是ヲ賢人ト云フ去ハ直重  
道アル故ニ天下ノ政悪キヲ難義ニ思ヒ諫言  
ノ一通ヲ捧ケ申ケレハ其職ニ非スシテ是ヲ  
計ル事有恐トテ義政金言耳ニ逆テ終ニ熊谷

月 終 熊谷





續

表記卷之六四終大尾

六四終大尾

門  
卷  
六

ヲ追放セテレシトナリサレハ諫ニ官ナシト  
云古語モアレハ上人為民卿為ニ宜シキ道ア  
ル事ヲ云フ者ハイツレトテモ取用ルハ君ノ  
道タリ然ルニ是ヲ追放セラル、事義政公ノ  
一失オラシカヤ、

月  
卷  
六



明治八年五月

以岡谷繁實所藏本寫之

課長七等出仕岡谷繁實實印

同 寫字生 宮田 延義 校

内務省  
文書部  
御用

